

もう一つのローマの歴史 origo gentis romanae について

楠 田 直 樹

はじめに Origo gentis Romanae [以下 Origo と略記] とは何なのか

ローマ史研究の別の局面として、この作品について考えておく必要がある。長らく後世における作品だと思われていたのだが、実際には古代後期の作品であることが分かってきた。実際のローマ史の捉え方と並行して、ローマ史の背後にある何かを取り出すことが可能なのか、それとも単なるローマ史の焼き直しに終始したものか、などを考えるための機会を与えてくれるものである。

後4世紀末のある年に、何者かが起源からローマの歴史を叙述しようとした。起源といっても、ローマがまだ建国される千年も前から後4世紀に至るまでの膨大な時間を叙述しようとしたものである。これと比較できるほどの浩瀚な叙述は類を見ない。ただ、アウグストゥス帝の時代、紀元前後の騎士階級の時代にティトゥス・リーウィウスがとりわけ内在する出来事をその作品の中心に据えて叙述していた142巻にも及ぶ歴史を描いていた。だが、その時代とは違って、もう終焉に近づいていた時期であって、その宮廷に文学者や詩人たちを抱えるような著名な君主がいなかっただけでなく、帝国がその世紀の中で軍事的な危機にあり、伝統的な宗教との確執を露わにしていた新たなキリスト教徒たちの普及に結びついていた難しい状況とともに存在していた。そこには想像以上のトラウマ状況を呈し、反抗や叛乱に近いものが

続発していた。それだけにとどまらず、ラテン文学は、少なくとも『異教』的な鼓舞に終始し、内在していた危機が時とともに噴出していったように思えた。新たな作品を提出するどころか、前世紀のさまざまな作品を解釈したり、解説するだけであり、『閉鎖された小さな世界』に閉じ込めたり、さほど必要とも思えないような探究に固執した雰囲気醸し出すのがやっとなのであった。

このような観点から、氏名不詳の作者はある面でいい意味での彼らの仲間であった。その同じ4世紀に、皇帝の単一伝記集、いわゆる *Historia Augusta* も提出されていた。その作品は一世紀半にも及ぶ皇帝群像を描写し、皇帝の胸像回廊のようで、何の関心も見せないような饒舌で物語を満たすことも、信憑性に基づいた典拠から出てくる言及もなく、スキャンダラスな伝記の中に十分すぎるほどの内面性を描写しようとしていた。若干の野心を抱いていた、帝国書記官であったエウトロピウスは、この時期のローマの歴史を描き、彼の基本的な文体で、簡便なラテン語で述べていた。その序文の中で、エウトロピウスは二つの用語、すなわち形容詞の *brevis* と副詞の *strictim* を用い、不必要な叙述で政治軍事に精通していた皇帝ウァレンスに捧げていた⁽¹⁾。

ここで関心のある氏名不詳の編集者は、そのことを取り上げていないし、解説もしていない。ただ、すでに存在していた三つの作品と一緒にしていた。一つ目は、ローマの先史時代、すなわちヤヌスのラティウム到着からロムルスとレムスによる都市建設までに関する部分である。二つ目は、王政共和政時代の英雄たちの伝記を含んでいる。三つ目は、361年から363年まで皇帝であったユリアヌスに続く人物として登場してくるセクストゥス・アウレリウス・ウィクトールによって公刊されたもので、アウグストゥス帝の元首政からコンスタンティヌス帝に至るまでの時代を包含している。これら三作品の一作目は、一般的には *Origo gentis Romanae* として知られており、確かに三作品の中で最も興味深い部分である。

それらの写本は現在、次のように存在している。

1. O: Bodleian Library, Oxford. Ms. Can. lat. 131. 15世紀。人文主義的書法で書かれているが、ゴート的な要素が混交している。原初的には、ベッサリオネ枢機卿の所有していたもので、19世紀末にヒルデスハイマーの蔵書から再発見されるまで消失していた。

2. P: Royal Library, Brussels. Ms. 9755-9763. 15 世紀後半。“Codex Pulmanni” という名でも著名。フランドル地方で模写され、人文主義的書法で書かれていた。リエージュのサン・ドゥニ教会の補助司祭ジャン・ドゥ・ロエメルのもとにあったのち、研究者テオドル・ポエルマンが取得し、*editio princeps* (Anversa: Plantin, 1579) の作者でイエズス会士ショット A. Schott の顔でそれを獲得していた。最終的に、アンヴェルサのイエズス会に渡り、ブリュッセルの王立図書館に加わって、1850 年にテオドル・モムゼンがそれを再発見した。
3. M: Il Codex Metelli, ジャン・マテルに所有されていた第三の写本で、17 世紀初期から消失。マテルは、同時代の人文主義者で、1579 年以前に書かれていたセバスティアノ・ピーギに文学でそれを扱った多くの文献学研究を繰り返していた。*editio princeps* のためにショットから用いられ、O とか P の写本からの写本ではなかった。

これら三作品の連結構成を述べるには紙数の関係上無理であるが、ローマの歴史を物語る上で、神話的な起源から密接に結びついた同時代性に至るまでを述べることは重要性がある。ともかく、これら三作品を連結させた氏名不詳の編纂者については、少しずつ明確にさせていこうと考えているが、原初的にそれぞれ異なった史料であったものを連結させるという可能性に触れながら、若干の説明やその信憑性について効力を求めているかなければならない。例えば、ほぼ確かなことは、その原初的な典拠が短いもので、ほとんどの古代の歴史作品でそうであったように、かなりの装飾を加えられている。それ故に、編纂者によって装飾された collage に関して現実的な結果を並行させながら、原初的なものの中で *Origo* を開示していかなければならない。編纂者の立場には、一種の題名と索引を持ち上げている。それはまさに 17 世紀のヨーロッパの流行と大雑把に見て類似する部分がある。それを全く異なったものと見るのか関連性を考えるのかは読者の側に選択権がある。次のような文節がある。

ローマ人民の歴史は、彼らの後継者として諸王を通して創建者ヤヌスやサトゥルヌスからコンスタンティウスの十度目のコーンスル職に至るまで、ウェッリウス・フラックス、ウァレリウス・アンティアティウス（少なくともウェッリウスという人物が『アンティア』に関して言及されていると考

えられる)、さらにはポンティフェクス・マクシムスの編年史、キンキウス、エグナティウス、ウェラティウス、ファビウス・ピクトール、リキニウス・マクロー、ウァロー、カエサル、トゥベローによって描写され、そうした初期の作家たちによるそれぞれの歴史叙述があり、近年の研究成果によれば、それらがリーウィウスにしろウィクトールにしろ影響を与えている。

このように、題名と索引は大きく見て *Origo* に帰する史料の指摘を有益にしており、さらに言えば、共和政時代のラテン歴史叙述の内在的な均衡を扱っている。そこには二部や三部の部分が部分的に構成されており、典拠に単一的な指摘を与えている。リーウィウスの作者から既に述べてきたアフリカ起源のセクストゥス・アウレリウス・ウィクトールのような他の作者にまで続く基本的な史料に関わっている⁽²⁾。題名や索引という語彙は、実際には *Origo* そのものを失ってしまうことにもなりかねない。その中で明らかに作者は名前が編纂者によって保たれていた作者たちに大いに注意を払っていたことが窺える。また、『コンスタンティウスの十度目のコーンスル』という指摘が *Origo* そのものの中にはなかったとも推測されるし、編纂者によって新たに広範な年代記にする意図を強化するために説明的に付加したとも推測される⁽³⁾。

編纂者による精緻さを導入しようとするための第二、第三の介入は、*Origo* から *corpus* の第二作品への通過点として役立つ一種の *liaison* である。それは一般的に *De viris illustribus* の題名で知られている。実際、*Origo* はある知らせで結んでいた。すなわち、レムスはロムルの死後に生き残っていたはずだとするものである。作者の気持ちと完璧に首尾一貫していた。確かに起源を物語る珍奇で少数の文節を蒐集したものだった。しかし、*De viris illustribus* を開眼する俗語的な表現とともに目に触れなくなっていった。それによれば、レムスはロムルスによって築かれていた溝を飛び越えようとしたかどで殺害された。既述していた題名と索引の中に見受けられる若干週刊誌的なこの同じ事件とともに、編纂者は、*De viris illustribus* の基本史料であるリーウィウス史料とは対照的な *Origo* に根差した文章として言外の意を示している。そして作者の意図を汲み取った歴史家は論議すらしていない。その意図は、アウグストゥス時代の歴史家によって伝えられていた物語が確かに好まれていた一方で、*Origo* の多様性が包含されているということだった。

続く数十年間かつ続く世紀の中で編纂者の書物がどのような幸運にありついていたのかを述べるのは困難極まりない。思うに、中世に編纂者によって望まれ想像されていたような内容を含んだ三作品の二本の写本が残存していた。一つ目がいわゆる *codex Metelli* で、16 世紀の人文主義者イオアンネス・メテッルス *Ioannes Metellus* に所蔵され、彼の同時代の人アンドレ・ショット *André Schott* がともかくも *Origo* の初版を印刷し、カロリング朝時代に遡及されるものと考えられていたが、現在では散逸してしまっている。二つ目は、消失してしまっているが、現在編纂者の書物に赴いていた二つの *codex* が単一になって残存している写本である。そのいずれもが 15 世紀後半に遡及され、それぞれオックスフォードとブリュッセルで保存されている⁽⁴⁾。現在では大事に取り扱われており、古典文献学者たちに専門的に取り扱われている。古典作品の場合には、単一の写本が残存しているか、あるいはルネサンス期に印刷された版として残っていた。それは暫くして散逸してしまった *codex* についても言えることである。考えられることとは反対に、*Origo* の典拠は相対的に確実な基盤の上に築かれていた。他の典拠や複雑なものは、それに反して、現代の研究者に言われる諸問題が生じている。そして間接的に読者に現在の書物として与えられている。

註

- (1) エウトロピウスの筆力で、ウェアレンスはさほど満足していなかった、と。ウェアレンスは別の書記だったルフス・フェストゥスに伝えていた。いずれにしても、エウトロピウスの作品は彼の後継者たちによってかなり縮小されて概要的に伝えられている。古代後期の作品の傾向性に関して、Fabio Gasti, *Introduzione a Eutropio*, Sant'Arcangelo di Romagna (RV), 2014, pp.VII-L, part.VII-XX を参照せよ。しかし、そこにはごく簡単に概要が述べられているだけである。異説を別にして、翻訳は書記官たちに帰している。
- (2) Momigliano, A., "Some Observations on the 'Origo gentis Romanae'", *JRS* 48, 1958, pp.56-73, part. 57-8 (=Secondo contributo alla storia degli studi classici, Roma, 1960, pp.145-76; =Roma arcaica, Firenze, 1989, pp.421-48) は、研究者の間で大いに汎用されているように、ただ単にそれを構成す

る典拠の初期的なものとして **corpus** そのものに言及されているに違いないと正当に評価していた。その証左のために、古代後期の他の例証を引用している。そこで **origo** という語はその『起源』という意味感覚だけで使用されているのではなく、同等に『歴史』という感覚も持ち合わせている、としている。ただ、その二者択一的な説明を除外するものではない。題名そのものは効果的に **Origo** に属するもので、それがまだ自立的な小作品であったときからである。その小作品はヤヌスやサトゥルヌスからロムルスに至るまでのローマの歴史を物語っていた。こうした場合に、その意義を並行的に支持する必要性はないはずであり、**origo** という用語はその意味自体を維持していたはずである。そこで生じてくる疑問に関しては、Richard, J.-C., ed., *Pseudo-Aurélius Victor. Les origines du peuple romain*, Paris, 1983, pp.9-11&n. を参照せよ。そこに広範な参考文献がある。

- (3) 編纂者の短絡的な介入は、『彼らの後継した諸王を通して』という表現の中で注意喚起しているはずである。**Origo** に言及されているその文節は、そこから恐らく文言が始まったのであろうが、作者が効果的にヤヌスからロムルスへの君主後継様式の中で物語を構成しているので、その表現内容は正しい。それどころか、**corpus** そのものに言及されているように、その文言は直接的に神話上の諸王から帝政時代の諸皇帝へと結びつけて終わっている。あたかもローマが共和政時代を知らなかったかのように。近年では、この『除外』に関する喚起が注意を促している。Ando, C., “Mythistory: The Pre-Roman Past in Latin Late Antiquity”, Lappin, H., ed., *Antike Mythologie in christlichen Kontexten der Spätantike*, Berlin-Boston, 2015, pp.205-18, part. p.217.
- (4) Codex Metelli に関して、研究者たちの間で大いに普及している。Momigliano, A., “Per una nuova edizione dell’<Origo gentis Romanae>”, *Athenaeum* n.s.36, 1958, pp.248-59(=Secondo contributo alla storia degli studi classici, Roma, 1960, pp.177-89; =Roma arcaica, Firenze, 1989, pp.409-19). もっと近年のものとしては、Mazzarino, A., “Appunti sul metodo III. Per un’edizione critica dell’<Origo gentis Romanae>”, *Helikon* 33-34, 1993-4, pp.461-512; Festy, M., “À propos du <Corpus Aurelianum>:

à la recherche des leçons du <Codex Metelli> perdu”, Pallas 41, 1994, pp.91-136; Sehlmeier, M., ed., Origo gentis Romanae. Die Ursprünge des römischen Volkes, Darmstadt, 2004.

1. Origo gentis Romanae の内容

Origo gentis Romanae はいったい何について語っているのか。既に述べてきたように、その作品は編纂者によって一体化させられた歴史作品の連続化の第一部であり、ローマの歴史のまさに『神話』ともいうべき段階を叙述している。研究者たちがその作者が誰なのか探し求めるも、編纂者の人物像についてもその家族性についてもわからないままに、作品は作者不詳のままである。ただ、その可信性について、Origo が神秘性を与え続けている中で、どこまで作者不詳のヴェールを剥ぎ取ることができるのか、考察してみたい。この人物はまずヤヌスとサトゥルヌスがラティウムに到着したことからローマの起源を始めている。神性に終始しているわけではなく、選ばれた人物として描かれ、彼らの誠意を求める人々の表現体として登場し、彼らのおかげで感じられる膨大な利点と打って変わって、誠実な神性としてその死後に言及されていた。第一行から、氏名不詳の作者の決定的に『半神話』的な調子で始まっている。万神殿の伝統的な神性が Origo の中で考慮されていた事実は、例外的な人物というだけではなく、農業とか文字や文語、あるいは法律とか貨幣に至るまでの特別に重要な文化的制度の創建者であったことを示唆している。神々の創成は、草創期の人々の単純に野生的な本能を示しており、その過渡的な流れやどこからやってきたのかを述べることを止めて、原初的な神性をもった創建者だと考えようとしていた。あるいは、彼らの寛容さから生じてくる恩恵という理を考えたがっていたようである⁽⁵⁾。この教義名エウエメリズムが前4、3世紀に活躍していたメッシーナ出身の哲学者エウエメロスが当初それを支持しており、氏名不詳の作者が神話的歴史的編纂を手掛ける前の世紀にローマでかなり著名になっていた人物と結びついていたと考えられる。すでに詩人エンニウスが前3、2世紀にその経験主義者の精神を受け継ぎ、「エウヘメルス Euhemerus」を構成していた。そこでこの考えの教義をラテン語読者に俗語的に使用していた⁽⁶⁾。

ヤヌスやサトゥルヌスからアボリゲヌス地方の人々を統治していた君主の

系統があり、その地方の人々は少なくとも氏名不詳の作者によれば、長く続いた移民ののちにラティウムに達していたか、あるいは宇宙のデイルウィウスのうちに保たれていた人間性の分散で生き残ったと述べている。そのような系統に、ピクス、ファウヌスそしてラテンが属していた。最初の王国のもと、その地域についてローマが出てきて、新たな移民が登場し、最初にパラティヌス丘に居住したのはエウァンドロスの人々であった。それに反して、一時的にラティウムに移り住んでいたファウヌスの時代に、ギリシアの英雄ヘラクレスが怪物退治の活動に従事しながら、**Ara Massima** という非常に古い崇拜をもつ将来のローマの地域を創建していた。それから半世紀のちに、ラテン民族がアボリゲヌスに君臨していた頃、ついにアエネイスがやってくる。彼はトロイアの英雄で、西方への旅はローマの建設神話とともに長期間を費やしていた。

氏名不詳の作者は、ラテン文化の中ですぐさま叙事詩が受けていた広い意味での反響にもかかわらず、かつ氏名不詳の作者自身がウェルギリウスの典拠に関して多大な関心を寄せていたことを明らかにしたり表したりしていたにもかかわらず、そうした神話の中でウェルギリウスが「アエネイス」で与えていた構成から特に影響を受けていたとは思えない⁷⁾。こう見てくると、わずかな事例に限定されとしても、**Origo** はアエネイスの父親であるアンキセスにまで到達させられる。父親はウェルギリウスの中ではイタリアではなくシチリアで亡くなっている。ナエウィウスからカトーに至る古典ラテンの叙事詩や歴史叙述にまで結びつけられ、ラティウムにやってくるまで息子の傍らでまだ生き残り行動を共にしていたトロイアの老獪な王としてその役割を与えられていた。その動因として考えられる観点から、アエネイスはイタリアでラテン部族の王の娘ラウィーニアと結婚していたが、異なった伏線として、他の史料から注目されるものがある。ただ、ウェルギリウスには全く触れられていない。そのため、その女性には実際には、デロス島のアポロ神殿の僧侶アンニウスの娘であった。そしてアエネイスはエーゲ海のその島に達した機会に彼女と知り合っていたというものである。

続く章の中で、アエネイスとその仲間がイタリアに居住地を獲得した物語や英雄の死、その世襲の物語、さらには息子アスカニウス、その後のアルバ・ロンガの建設の物語、またローマが母国になり、ついにはロムルスとレ

ムスの双子の誕生という物語に至るまで、氏名不詳の作者は実際には決定的にウェルギリウスと同様の流れを辿っており、異なった作者から 10 以上に及ぶ引用を横に捨て去ることになった。そのうちの若干のものは、共和政時代に残存し、大概是『編年史家』が定義づけているものとともに大筋の流れに属している。一般的にコンスルの後継による都市獲得を物語っていた歴史家たちは、毎年のようにローマという都市の創成から書き始め、のちにはそこに単一の伝記を付属させ、単一の出来事あるいは一連の出来事を選択しながら、歴史叙述的に特別な喚起をそこに引き起こし、ローマの歴史を取り扱っていた。年代的には、氏名不詳の作者を利用していた編年史家たちは前 3 世紀後半に遡及していた。そうした作者の中には、ファビウス・ピクトール、キンキウス・アリメントゥスやローマの歴史をまだギリシア語で叙述し、『普遍史』としていた初期ローマの歴史家たちが名を連ね、そこにアウグストゥス時代の作者も加わっていった。ここで引き合いに出した作者たちに関しては、若干の場合彼らの名で扱っており、その作者たちの名は **Origo** 中の述べられているだけである⁽⁸⁾。その一方で、他の作者たちの中には、他の史料からの注記とともに **Origo** の史料と結びつけることが可能であり、さほど正確ではない流れを汲み取り、できればその引用がなされた原初的な作品の何らかの『足跡』を見ることができる。ローマの編年史家たちの年代記のいずれもが現在まで誇張されて伝わっていることが事実である。そのほとんどに関して、作品の題名を認知しており、若干の孤立した断片も知っている。また、題材の誇張や配分に関する大雑把な考えをすることも可能である。

ともかく、このような貴重で散逸してしまった史料のおかげで、史料それぞれがどのような多様性に直面したり正当化されていたのかを見極めなければならない。また、氏名不詳の作者がローマ建設に導かれる出来事の全体像を一体化していたのかを見なければならない。再構成そのものは 23 章で見つかる。そこで、都市建設の特権やその名を冠する特権について二人の間でどちらに定めていったのかについて双子間での諍いを記憶している。それが神話構成の史料であり、修正されるはずのないものだった伝承によれば、ロムルスが勝利し、都市建設に生命を吹き込んでその名から『ローマ』と名づけられたというものである。レムスの運命に関しては、どこにもその後が見えず、**Origo** にすら全くその文節は見当たらない。伝承によれば、敗れたレ

ムスはロムルスに殺害されたことになっているのだが、それに反する多様な孤立した文節があり、恐らくはそのために氏名不詳の作者は最後の言葉の栄誉を譲渡している。その言葉によれば、レムスが生き残っただけではなく、ロムルスの死後すぐになくなっていった。その文節は前後の脈絡のないもので、その前の文節の中で言われているように、編纂者からの距離感が半端なく広がり、リーウィウスの物語のように正当な伝統主義者に反するものであったが理解できる。

註

- (5) 最近の研究として、cf. Winiarczyk, M., *The <Sacred History> of Euhemerus of Messene*, Berlin-Boston, 2013.
- (6) Lentano, M., ed., Anonimo, *un'altra storia di Roma, origo gentis romanae*, Torino, 2015, p.XVI: Sia ditto tra parentesi, questo non è come di solito si legge, un element che dimostra o conferma l'identità<pagana> dell'Aninimo: al contrario, l'evemerismo fu fatto proprio anche dai primi autori cristiani, perché era un comodo strumento per spiegare la genesi delle divinità che essi rifiutavano.
- (7) Lentano, op.cit., p.XVII: a certo momento rivela addirittura di aver cominciato a scrivere un commento all'Eneide, come pressappoco nello stesso torno di anni stavano facendo i grammatici Servio e Tiberio Claudio Donato.
- (8) Lentano, op.cit., p.XVIII. ともかく、何らその理由はなく、過去においてそうされていたように、氏名不詳の作者が自らの正統性を主張すべく、彼らの名を持ち出していたと考えられる。

2. 解決の難しい問題と理解される疑問

最近の10年ほどの *Origo* に関する研究成果は、新たな翻訳、解説、さらには典拠そのものの様相への貢献とともに、古代後期の作品だと見てきた若干の疑問を払拭するまでには至っていないものの何某かの進展がある。作者から作品の成立年代まで、編纂者が *Origo* から開かれた三作品を一体化した⁹⁾ ときから典拠の性質や巻構成まで、さらには引用の信憑性から氏名不

詳の作者が使用していた史料まで、のようなさまざまな流れを明確にしておく必要がある。しかし、これが今組上にあげた異なった問題に関する完璧な文献解題とは主題が異なっている。ただ、読者には少なくとも、読むことを困難にするとか、関心の多くの原因を追究させないとしても、疑問の大部分の情報は供給されている⁽¹⁰⁾。

現代のある研究者は、少し無情ではあり、不適切とはいえないのだが、**Origo**を「よく読まれていた史料の取次的な読み物の書式の性急な読み物並置によって構成された」一つの寄せ集めとして読むものとして定義づけている⁽¹¹⁾。実際、その現実的な様式の中で、氏名不詳の作者の作品は、暗闇の中にしばしば縛りつけられており、またはこの限界を超えるものであった。典拠を理解するための実質的な史料はなおざりにされており、次々に史料から史料へと移動していくことは少なくとも誤解が生じやすい環境下にあることは否めない。一つの史料から別の史料への通過は十分な明確さで記されているわけではなく、同じ物語に関する異なった文節を前にして思いがけなく見つかるといふ認識を持つておく必要がある。

本質的な情報の遺漏という古典的な事例は前章で述べてきた。ここで、氏名不詳の作者は他の史料からも著名なギリシア神話を持ち出してくる。アポロとアテネの王女クレウサとの間の息子で、ギリシアの人々の一派イオニア人と同名の英雄イオネの物語で、ローマ人がヤヌスと呼称する神と同一視される⁽¹²⁾。

それに反して、判断を誤らせるような文節に関しては、22章の始まるの部分が引用される。それは次のような文節で始まる。すなわち「その結果語っていたことが生じた」と⁽¹³⁾。一般的にこのような言い訳は、氏名不詳の作者が前章で叙述してきた出来事に続く出来事を導入していたという意図が見え隠れしている。つまり、ロムルス側から篡奪者アムリウスの殺害、実際には22章に含まれていることは単純に同じ物語とは異なった文言であり、より豊かに別の角度からの方向づけである。

氏名不詳の作者が史料を代えているにもかかわらず、読者にそれを告げていない場合を見ておこう。アルバ・ロンガの合法的な王で、いうまでもなくロムルスとレムスの祖父であるヌミトルに関する物語のほぼ全ての文節は、暴力的な篡奪について、あるいはアムリウスの側からの被害の詐欺的算段に

ついて語っている。物語の実質的な年代は、ヌミトルの息子を殺害し、双子の将来の母親になる娘を聖職に縛りつけるというアムリウスの選択は権力を保持することによって可能になった。それは将来にわたって自らの権力を保障し、復讐をさせないように取り計らった算段であった。さて、19章を見ると、氏名不詳の作者が逆に物語の多様性について言及している。それによれば、アムリウスは家族の財産を全て受け継ぐ代わりに兄弟に玉座を譲渡することを申し出ていた。統治する努力を怠らない方向に傾き、喜んでその申し出を受け入れていた。少なくとも一つの史料は本質的な点に関してロムルスとレムスの誕生に関わった出来事を修正していた⁽¹⁴⁾。アルバ・ロンガの玉座が二人の後継者の間で争われたという要素を強く否認し緩和しようとしていた。そうでないにしても、すぐ続く行の中で、氏名不詳の作者は、広く行きわたっていた変更そのものがあたかも行われていたかのように表現している。アムリウスの側からのヌミトルの乱用の剥奪を嘆願するかのようにも表現されている。明らかに、**Origo** は当初の史料から乗り換えて、それとは異なり、伝統的な史料へと続けていった。しかし、この見方の変遷について読者は何の揭示も受けていない。

ここで議論されていないさまざまな史料は、時代的にずっと以前に遡及される原史料のかなり強く、不完全に圧縮された文節が現在普及しているために、それこそが **Origo** の中で見ていくことのできる立場を正当化していると考えられる。何世紀にもわたって手書きで写本され、あるいは編纂者の不手際や未熟さを伴ったあらゆる作品で生み出されてきた単純な技術的錯誤は典拠の現状を十分に説明できるものではない。別の疑問は、もし作者がいらない、少なくともこの潜在的な **Origo plenior** が構成された時代には私たちが読めるものは『要約』以外のものではないだろうという中で、当然同一視できるかどうかである。ここでは仮説に範囲を大きく開いて、特別な文献に関心を寄せる読者に参照してもらうことを好む⁽¹⁵⁾。ただ一点だけ言うことができる。かなりの信頼を寄せられて、文法学者ウェッリウス・フラックスの作品の中で個別化されていた主題を享受することができる。フラックスは、アウグストゥス帝と同時代人で年齢もほぼ同じ世代であり、文章的には記憶されることという意味の “*Rerum memoria dignarum libri*” と名づけられた物語の作者である。それは貴重な博学的知識であったにもかかわらず、“De

verborum signicatu” が以前の要約を通じてのみ現在までその名を知らしめていた⁽¹⁶⁾。

事実は、古典主義者たちの中で取るに足らない恐れ *horror vacui* を静める試みが作者不詳の作品を他の史料からすでに有名になっていた人物へと結びつけながら、通常強いものだったが、古代の作家たちが情報を保持している以上だった明確な認知とともに遭遇していたことである。さらには、方法論的には現存していない上に、その内容が後続の作者たちの一時的な示唆によって推察されやすいようなもの、例えばウェッリウス・フラックスのような一つの史料を仮設するには賢明さの欠落は否めない。予測できないときに発見されたものを除いて、氏名不詳の作者は要するに、ローマの起源の再構成を共有していたときから始まって、このような蓋然的な史料を残す運命にあった。それ以上に、**Origo** の典拠そのものから推察されることを基本にして、その全体像を辿っていきこうとしていた。

それよりもまず、氏名不詳の作者はウェルギリウスの註解者であって、とりわけ **Origo** で判別した関心事から生じてくるように、決して『純粹』な歴史家ではなかった。彼の作品の前半⁽¹⁷⁾ が実際に『アエネイス』の註釈に原初的に関連性のある書式の調和から生まれていたはずである。恐らく、**Origo** 全体がウェルギリウスの主要作品の言語学的博識的な註釈に当初から機能していたことが不可能であるとはいえないだろう。『アエネイス』の註釈を実体化する材料を蒐集し、次いで原初の最終形に関して自力で抵抗していた。起源論の関心は、*capite velato* や語源研究から生じるものを犠牲にして、典型的なローマの使用歴から、すなわち慣習や地名の起源に関連して、この考え方の中で首尾一貫しているといえる⁽¹⁸⁾。

同様に、その全体を見ることなく残存の運命にあったのは、編纂者といわれる人物であり、*Historia triperitita* を一緒にした文人である。ここで諸見解は次のように揺れ動く。すなわち、

- a) 第三、最終部分の作者であったアウレリウス・ウィクトールと同時代人ではないか。つまりこの最終部分が360年かその前後に付されるという仮説をもって。
- b) 中世に至るまでの年代的な流れを広げるもの。つまり、*collage* が5、6世紀にイタリアにおける西ゴート族の王であったテオドリックの書記

をしていたカッシオドロスという博識な人物の作品ではないかとする仮説をもって。

c) あるいはテオドリックの周りにいた博識者たちの中の一文人ではないか。というふうな見解が存在している⁽¹⁹⁾。ローマ史の全体像がこの最後の時期にも構成されており、また多くの世紀で書き記されていると推測している。しかし、王、英傑、360年に中断される皇帝という流れがその時代に直接的に近接した中で実現化したかどうかというだけの感覚があり、そうでなければ不備を生じていただろうし、その意味の大部分を失っていただろう。

別の疑問は、もっとはっきりとしたある種の文言について、題名と索引を設定する以上に、そしてすでに *De viris illustribus* で *liaison* を記憶していた以上に、編纂者は、それを削除したり、あるいはともかく修正したり、自らが精通している中に入ってきた *Origo* の典拠に再び触れていた。当然のことながら、この質問は、自主的な翻訳にとっても *Origo* に精通していたかどうか、すなわち *Historia tripertita* の一部としてそれがそれ自身典拠として伝えられていた以上のものであったのかどうかという案外容易な応答であろう。しかし、そんなことはない。編纂者が遺したのものとしての *Origo* と氏名不詳の作者の手によって原初的に表面に出てきた典拠との間の関わりは、推測で再構成されていたに違いない。さて、この一点で、年代設定は、*Origo* の研究者の多くにとって重要性を帯びていると思われる。すなわち、題名と索引と言われたものの中で、*auctores* として述べられた事実、そして氏名不詳の作者の史料として述べられた事実の中で、*Origo* の典拠の中で比べられることのない三人の名は何とか読み取ることができる⁽²⁰⁾。だから編纂者が典拠の中で引用されたことのない作者たちを題名の中で述べるという感覚をもっていたとは思えないので、その三人の名の欠落が氏名不詳の作者の典拠に関して同じ編纂者による無分別な削除という結果になることを助長していた⁽²¹⁾。

否定はできないと思われるのだが、編纂者が決定的に不運だと示唆している主張は、彼自身によって再構成された主題の中で、その主題が言及している典拠によって否定されてしまっていることに注意することなく、いくつかの名を残していることである。写本伝統の偶然性によってそうした名が抜け落ちてしまったと考えるのが最も可能性が高いといえる⁽²²⁾。

さて、別の疑問に目を移していこう。*Origo* の信憑性に関連して、判断材

料としての過去に目を向けるのではなく、とりわけ作り上げられたいくつかの引用に目を向けてみよう。今日、ドイツの大家バルトルト・ゲオルグ・ニープール（コペンハーゲン生まれだが）が提案してきた主張にもう誰も目を向けない。彼はなかなしくレオパルディの知友であったのだが、その主張は **Origo** が 14 ないしは 15 世紀の人文主義時代に偽作として登場してきたというものである。その時代は全く無縁ではない時代なのだが、古典文学の失われた部分を何とか修復しようと渴望して、何かに類似した偽作を生みだしていたと主張している。しかし、もしこの判断が **Origo** に関する現代的研究史の中でかなり早くあらゆる部分を動かせていたとしても、なかなか強固だったのは、氏名不詳者によって引用されている、あるいは巧みに敷衍されているローマ共和政時代の編年史家たちの多数の断片が実際には、物語に繊細な教義、または信憑性の気配を授けるべく、それなりの立場に虚構的な製作を試みていたという確信が存在していたことである。この主張の急進的な支持者の中には、**Hermann Peter** がいる。彼は、断片を最初に秩序だてした研究者で、古典文献学者たちの間ではとりわけ 1870 年にローマの歴史家たちの浩瀚な断片集成である *Historicorum Romanorum reliquiae* を発刊したことで著名であり、その断片集はほぼ一世紀半にわたってラテン歴史叙述に関するあらゆる研究の基本的言及として使用されている。首尾一貫してその説明とともに、**Peter** は自らの集成の中で氏名不詳者の典拠から推察でできる引用を構成的に報告することを省略していた。彼にとって、それどころか、**Origo** 全ては「異教的」な伝統の重要性を確言し、キリスト教の上向きの確言を食い止めるような偽作的な主張を形成していた⁽²³⁾。

この観点に関する決定的な展開は、ただ **Peter** の主張への批判が 19 世紀後半には実際に始まっていたのだが、**Arnaldo Momigliano** の立場の影響力とも結びついていった。彼はロンドンに避難しながら、ファシズムの人権に強要された大歴史家で、**Momigliano** は、1950 年代末まで遡及される一連の介入の中で、**Origo** の中に使用されている引用のいずれもが「立証可能な偽造」であるとの立場を支持し、その主張は彼の議論の余地のない信頼性のおかげで以後の結果を賦課していた。この観点の正統化は、今日共通の土壌で受け入れられ、偉大な碩学者によって今一度表に出てきた。その主人公になったのが **Tim J. Cornell** である。彼は共通の研究土壌の基礎になるラテン史家断

片集の新たな集成を 2013 年に研究者たちの協力を得て改正した。その集成の中で、Peter の時代には省かれていた引用が例外なしに記録されていた⁽²⁴⁾。

かなりの困難さを伴って再構成されてきている道筋にとって、なおかつ仮定的な方法で、Origo は要するに、時代をかなり遡った作者たちによって描写されたローマの古い歴史に関する物語をさまざま混在させていた水溜りのようなもので、その作品そのものは現実にはもう無いに等しい。改変され、頁ごとにそれが繰り返され、さらにはときに勘違いや改竄がなされたうえで、Origo の話は現有歴史家たちについて現存している全てのものであることが多々ある。その一方で、起源神話は雑然とした形式の中にあり、引用そのものから生じたもの、そこでのみ知ることのできる貴重な史料の中に位置していた。

註

- (9) 現代の研究者たちは、それを *Historia tripartita*、すなわち三つの部分に分けられた歴史だと定義づけている。
- (10) 関心を抱いた読者のために、二次的な文献の広範な引用や Origo から生じてくるあらゆる問題点の構造的な分析とともに、もっと広範な *status quaestionis* を与えておく。それは、Schmidy, P.L., “Das Corpus Aurelianum und S. Aurelius Victor. II. Origo gentis Romanae”, *PW vol. supplem. XV*, München, 1978, coll.1602-34. に提示されており、もっと簡便には、Herzog, R., ed., “Origo gentis Romanae”, *Handbuch der lateinischen Literatur der Antike*, vol.V, Restauration und Erneuerung, München, 1989, pp.184-7. がある。
- (11) Flores, E., “Per la ricostruzione del testo di <OGR> 11, 3 e il <B.P.> fr.3 M. di Nevio”, *Studi di filologia classica in onore di Giusto Monaco*, vol.III, Palermo, 1991, pp.1269-73, part.1271 [= Id., *La Camena, l’epos e la storia. Studi sulla cultura latina arcaica*, Napoli, 1998, pp.153-57] で取り扱われている。
- (12) 確かにこの二つの名には類似点がある。ギリシア語では *Ἴων*、ラテン語では *Ianus* になる。しかし、ギリシアの英雄とラティウムの神という、この二人の人物を結びつけるものについては何ら根拠がなかったので、

現存している典拠の中で『イオネ』の名は全く出て来ない。

- (13) Lentano, *op.cit.*, pp.XXI, 56-7, 100 n.1.
- (14) この尋常ではない物語の文節がどのように進んでいくのかを好奇心から知りたいものであるが、残存史料が全く足りない。
- (15) 『要約』ということに関する理論は、偉大な歴史家で文献学者であった Theodor Mommsen によって最初形成されていたが、*Origo plenior* の存在が前提されており、最近までそのように考えられていた。若干細部にわたる違和感はあるが、とりわけ、Richard, J.-C., ed., *Pseudo-Aurélius Victor. Les origines du peuple romain*, Paris, 1983, pp.32ff.; また、それとは異なって、Momigliano, A., JRS 48 *citat.*, part.pp.66-8.
- (16) その観点で、特別な作品として次のものがあげられる。Richard, J.-C., “L’<*Origo gentis Romanae*> et Verrius Flaccus: essai de mise au point”, *Helmantica* 34, 1983, pp.533-42; Cameron, A., *Greek Mythography in the Roman World*, Oxford, 2004, pp.330-1; Sehlmeier, *op.cit.*, pp.119ff., part.126. Cf. Frier, B. W., <*Libri annales pontificum maximorum*>: The Origins of the Annalistic Tradition, Ann Arbor (Mich.), 1999, part. pp.44-5; Cornell, T. J., ed., *The Fragments of the Roman Historians*, vol. I, Introduction, Oxford, 2013, pp.96-01, part.99. 今日では顧みられない他の提示に関して、その中でも、自ら書き始めたことを宣した『アエネイス』に関する解釈を対象にして氏名不詳の作者自らによって与えられた情報に基づいて、ウェルギリウスの古代後期の大解釈者であったティベリウス・クラウディウス・ドナトゥスもいたが、Puccioni, G., “Studi sull’<*Origo gentis Romanae*>”, *Studi urbinati di storia, filosofia e letteratura* 30, 1959, pp.27-85. によって用意された *Origo* に関する丹精をこめた研究史を参照せよ。
- (17) とりわけ第1章から第9章までの中で、ウェルギリウスからの引用の存在がどっしりとして重厚さを与えている。
- (18) アポリゲヌスの名や都市ラウィニウムの名などが考えられる。また、*Origo* が実際二つの原初的に異なった典拠の混合から生まれたのではないかというテーマは忘れ去られるものではない。全てを参照しなくても、明らかに D’Anna, G., ed., *Anonimo. Origine del popolo romano*, Milano,

1992, pp.XXI-XXII. を参照せよ。

- (19) このテーマに関しては、とりわけ、Puccioni, G., “La composizione dell’ <Origo gentis romanae>”, *Annali della Scuola normale superior di Pisa* 28, 1958, pp.211-23, part.222-3; Id., “Studi sull’ <Origo gentis Romanae>”, *Studi urbinati di storia, filologia e letteratura* 30, 1959, pp.27-85, part.52. が主張していた。それに対して、D’Elia, S., *Studi sulla tradizione manoscritta di Aurelio Vittore. Parte I. La tradizione diretta*, Napoli, 1965, p.27. は、corpus が 636 年に亡くなったセウイーリヤのイシドールスの時代にまだ残存していたのではないかと考えている。Richard, J.-C., ed., *Pseudo-Aurélius Victor. Les origines du peuple romain*, citat., p.19. は、580 年前後にその年代を置こうと考えている。
- (20) 正確には、ウェアロー、ウェラティウス、そしてすでに記憶されていたウェッリウス・フラックスのことを取り扱っている。
- (21) 当然のことながら、最終的な改作は、Origo の原文の災いに苛まれた歴史の中で最も前進した段階で、編纂者の介入ののちにも当然生じていた。Cf. Herzog, op.cit., p.185.
- (22) これはとりわけ、Momigliano, op.cit. の主張である。ただ忘れてはいけないのは、Origo を含んでいる二つの写本がかなり最近のものであり、続く再写本まで千年近く経過していること、そしてこの過程が典拠の腐敗という結果を伴っていることなどである。
- (23) 研究者は、とりわけ自らの主張を、Peter, H., *Die Schrift <Origo gentis Romanae>*, Leipzig, 1912. で論議していた。Cf. Richard, J.-C., ed., *Pseudo-Aurélius Victor. Les origines du peuple romain*, Paris, 1983. に与えられた論議に関する基盤がある。
- (24) Cf. Cornell, T. J., ed., *The Fragments of the Roman Historians*, 3vols., Oxford, 2013. また、Carandini, A., ed., *La leggenda di Roma*, vol.1, *Dalla nascita dei gemelli alla fondazione della città*, Milano, 2006. は、双子神話に関する使用可能なあらゆる史料を結びつけながら、Origo の証拠を蒐集している。多少とも、Origo の中に含まれている引用に関して近年の研究は、その信憑性に好意的なのだが、例えば Puccioni, op.cit., p.212; Richard, op.cit., pp.22-3; D’Anna, G., ed., *Anonimo. Origine del*

popolo romano, Milano, 1992, pp.XXIV segg.; Frier, B. W., “Libri annales pontificum maximorum”, The Origins of the Annalistic Tradition, Ann Arbor, Mich., 1999, p.43; Smith, C. J., “The <Origo gentis Romanae>: Facts and Fictions”, Bulletin of the Institute of Classical Studies 48, 2005, pp.97-136, esp.103. 比較的慎重な立場をとっているのは、Cameron, A., Greek Mythography in the Roman World, Oxford, 2004, pp.328 segg.; Neel, J., Legendary Rivals: Collegiality and Ambition in the Tales of Early Rome, Leiden-Boston, 2015, pp.21-2. である。別の疑問は、史料の性質上、氏名不詳者、あるいはその史料が博識な中間的な史料によって彼らのもとで引用されていたのか、由来されていたのか、ということである。

3. 現実離れた物語

ここまで論じてきた批判的文献学的な疑問や *Origo* の読解に関するさまざまな疑問から少しの間離れて、別の視点から話を進めていこう。ともかくその典拠の多様な様相に無知であるうえに、さまざまな疑問に適切な解答をすることができないのも事実であり、*Origo* が書かれた時代にそれはよく知られていたはずだし、誰がどのようにどんな関心を抱いてこのような情報を獲得していったのかという関心が途中で遮断されてしまったことは疑う余地がない。

まず、*Origo* の現在の読者を直ちに印象づけるのは、その時代である。そこにはローマの起源に関する神話が特別で疑いもなく豊富に描写されている。ローマ誕生に関する伝承の現代人の印象は、そのうちの一つの物語が存在していたときに、少なくとも同一的で限定的である。その物語は、アウグストゥス時代のリーウィウスやウェルギリウスの作品から基本的に形成されてきたものである。すなわち、

- i) トロイア人アエネイスと仲間たちがラティウム沿岸に到着
- ii) 地元民との小競り合い
- iii) ラウィニウムの王女との結婚
- iv) まずラウィニウム、続いてアルバ・ロンガの建設
- v) アムリウスとヌミトルの兄弟の出来まで、古い中心地を統治していた一連の王たち

- vi) アムリウス側から玉座篡奪、ヌミトルの娘レア・シルウィアを聖女に制約
- vii) レア・シルウィアが軍神マルスの子を懐妊
- viii) ロムルスとレムスの誕生、テヴェレ川への遺棄
- ix) 双子の救出とカピトリヌス丘の狼
- x) アルバ・ロンガに帰還せず、その地に新たな町ローマを建設
- xi) 双子の諍いとレムス殺害
- xii) ロムルスにのちの世界の大都市になる町の主人になる栄誉を与えるというふうに構成されている。

実際、この物語は見晴らしから生まれ、特別な特権に結びつけられ、ローマ建国神話に関する「権威」づけられた唯一の文節として再構成させていくことに貢献していた中世から近代への不変の運命と結びついていた。しかし、リーウィウスにしろウェルギリウスにしろ、全く白紙の中で作品を書いたのではない。都市起源に関する物語はすでになんかなり古いものだった。ファビウス・ピクトールのような歴史家たち、ナエウィウスのような詩人を中心とした初期ラテン文学の作者たちは、前3世紀後半に初めて書式の中でその物語を適合させようとしていた。その後、発展させ、修正を加え、枝葉を付け足し続けた。このような広範な文学的な製作はただ失敗を助長するのみだった。現在その結果、大まかな概要をわざとらしく簡約化した一握りの断片のみを認識するのみになった。それで、標準的なものとして認識された多様化が存在していたこと、その文節を俯瞰しつつ総合的に想起させること、そのような間違った見解を引き起こしていた。ただ、そこにはラテン文学から発した唯一の入念な見解もあったことは事実である。実際、かなり古い過去の物語に関して、ローマ人たちは幾世紀にもわたって自らの正統性について積み重ねていった。ほとんど恒常的に神話の場合には生じてくることで、この積み重ねが無数の多様性、孤立した発展、あるいは伝統に並行しつつ反するものを生み出していった。多少の幸運を享受しながら傍らで共存していたが、一つを排除したり他を消去したりすること全くなく増え続けていった。

例えば、起源神話にとって欠かすことのできない英雄の場合を考えてみよう。トロイア人アエネイスは、**Origo** の意義深い部分を占めている。ここで、その当時に関する複雑怪奇な疑問に解答を与えるのではない。その当時、当

該人物は、ロムルスとレムスという建国の祖先になることで、ローマの英雄物語の中で魅せられる存在だった。ギリシア神話の中でイタリキの土地への冒険あるいは建設がかなり著名であったオデュッセウスのように、かなり特権的な人物を排除しながら、敗北追放という人物、すなわち建国神話の「市場」でローマ人を抜擢させる意図でもって道理を合わせているように見える。あらゆることに関心を寄せる材料を与えつつ、氏名不詳者がそのようなことを取り扱っていない時から、これには全く関心を示していない⁽²⁵⁾。しかし、**Origo** が多様化していた神話に素早い要約をしていった一点が存在する。すなわち、アエネイスに関して、少なくとも謀反者がしていたこと、つまりアカイア人に自らの町を売り渡そうとある時に決断した誰かが他のトロイア人全てを破滅させることで自らの個人的安泰を考えていた。あたかもその情報が困惑の極に達していたルタティウスに寄与するかのように、可能な意図を憶測させている。要するに、ギリシア人は、その圧倒的な軍勢力でもなく、ユリシーズの考えで生まれた「トロイの木馬」のおかげでもなく、勝利を取めたのであろう。その結果、反逆という方途でトロイアの軍営の最大の計略を伴った戦士に行動させた。さらに、その人物は統治家系から出自してきた分家に属していた。

裏切りに因ってトロイアが陥落したという主張は、新しいものではない。ただ、その裏切り者の実体は常にトロイアのもう一人の英雄アンテノレを示していた。彼はホメロスの『イリアス』以降、プリアモスの「高位の身分」にあった成員の間で最も「柔軟」な人物として記述されていた⁽²⁶⁾。とりわけ、アンテノレに関して、その神話は、トロイア陥落後イタリア半島に到着し、アドリア海岸を北上しパドヴァという町を建設するという西方への長い航海に着手していた、ある瞬間を物語り始めていた。その町は中世後期に偶然にも彼のものだと思われる武具を発見していた⁽²⁷⁾。

しかし、トロイア英雄物語の中でさほど重要性が高いとは思えない人物を背教者に変質させること、ローマ人の祖先によりも少ない裏切りを咎めることが意図されている。また、この場合に、物語の最終形態は蓋然的にホメロスの中に出てくるはずである。『イリアス』の中に少なくとも、トロイアの英雄デイフォブスがアエネイスに援軍を求める決心をして、軍隊の後方に彼を見出したという単一文節がある。そこで、とりわけ、ホメロスの中に登場

する戦士にとって、不適切な立場については、「第一線で闘うこと」は兵士の榮譽と戦闘の英雄の総てを包含しているモットーである。事實は、ホメロスが説明しているように、アエネイスが「プリアモスがアエネイスを十分に讃えることがなかったのも、彼に対して腹を立てていた」と⁽²⁸⁾。

確かに、ホメロスが背信的な考えを指摘するにはあまりにも遠くかけ離れていた。それでも、偶然にも『イリアス』の中でほぼ残っていた文言は、続く世紀に醸成され、それを基にして次第にトロイア侵略の神話が形成され、アガ멤ノンやメネラオスに門戸を広く解放する準備が整った第五の植民市の一部として町の敵への陰険な譲渡は、勝利を収めることがなくとも失いすぎないように戦争を生き残る術であった。ホメロスの作品は歴史の宝庫であり、無駄骨にはならない。その概要はたとえそれが情況や関わりにおいて最小限のものであっても、忍耐強く物語られ、それに続く伝承によって価値を高められていった⁽²⁹⁾。確かに、Origo が編纂されたときに、背信者アエネイスの神話が古代後期に大きく普及していたことが認識されている。例えば、トロイア侵略の文節が偽ディッティ・クレテーゼの『トロイア戦争日誌 *Diario della guerra di Troia*』と同様の偽ダレーテ・フリージョの『トロイア陥落史 *Storia della distruzione di Troia*』という二つの偽作に残る唯一著名なもので、中世に大きな運命を定められ、さほど古いものではないのだがホメロスよりも信頼を置けるものに関して、エポックメイクな衝突の目撃証拠の制定法を回復させながら、その信憑性に基礎を置こうとしていた。

[未完]

註

- (25) この点に関しては、Bettini, M. & Lentano, M., *Il mito di Enea. Immagini e racconti dalla Grecia a oggi*, Torino, 2013. を見よ。さらに、そこでアエネイス神話の歴史に導かれる広範な調査を実施している。このような神話と Origo との関連に関して、Vanotti, G., *L'altro Enea. La testimonianza di Dionigi di Alicarnasso*, Roma, 1995, pp.61-6. のような専門的な研究もある。その一方、Senis, G., “Origo gentis Romanae”, *Enciclopedia virgiliana*, vol.3, Roma, 1987, pp.887-8. で Origo に捧げられた見解をいささか慌ただしく述べている。さらにあまり役立たないものとして、

Banchich, T. M., “Origo gentis Romanae”, Thomas, R. F. & Ziolkowski, J. M., ed., *The Virgil Encyclopedia*, vol.2, Malden (Mass.)-Oxford, 2014, p.944. があり、氏名不詳者に引用されているウェルギリウスの文節は全く記録されていない。

- (26) Lentano, M., op.cit., p.XXXII: ...Priamo, colui che non solo aveva ospitato presso di se' gli ambasciatori greci in occasione delle schermaglie diplomatiche che avevano preceduto lo scoppio della Guerra guerreggiata, ma si era sempre battuto a favore di una soluzione pacifica del conflitto attraverso la restituzione di Elena al suo legittimo consorte.
- (27) その詳細については、Puliga, D., “Padova”, Bettini, M., Boldrini, M., Calabrese, O. & Piccinni G., eds., *Miti di città*, Siena, 2010, pp.180-93. を参照せよ。Cf. Bettini, M. & Lentano, M., *Il mito di Enea. Immagini e racconti dalla Grecia a oggi*, Torino, 2013, pp.195ff. と関連脚注。
- (28) その引用は、Hom.II.13.455ff. からのものである。アエネイスとトロイア統治家系との間の軋轢の兆候はまた、Hom.II.20.178-83 のアキレウスの言葉を通して表立った。第 13 巻の文節の中でアエネイスという人物が一種トロイアのアキレウスとして論じられていることは公平に観察されていた。また、彼はアキレウスがアガメムノンとともにしていたように君主権そのものに対する苛立ちをもっており、そのうえ妨害行動に訴えながら自らの榮譽を守ろうとしていた。宿営地に戻りながら戦闘を放棄していたアキレウスと戦場に形式的に出ていたが、自らの立ち位置の安全を確保していたアエネイスとの実質的な差異はなかったとしても。この観点に関しては、Cramer, D., “The Wrath of Aeneas: <Iliad>13.455-67 and 20.75-352”, *Syllecta classica* XI, 2000, pp.16-33; Fenno, J., “The Wrath and Vengeance of Swift-Footed Aeneas in <Iliad> 13”, *Phoenix* LXII-2, 2008, pp.145-61. の特殊研究を参照せよ。
- (29) アエネイスについてギリシア系史料、すなわち不確かな年代の流れの中で歴史家であるザントゥスのメネクラトゥスではすでに背信者だとされていた文節は、近現代の仮説が前 5 世紀から前 2 世紀の中で定まらないのだが、それはトロイアの英雄がパリシ、間接的には彼の父であるブリアモス王に対して抱いていた憎悪の道すがらどのように町を敵に譲渡

する決心をしたのかを説明していた。メネクラトゥスは、アエネイスが「アカイア人の一人になった」(Dion.Hal.AR, 1.48.3) ことを確言しつつ、その態度が冷たいものだった。